

中学3年生の数学の授業を参観した。いつものことだとは思いますが、先生の明るい笑顔で授業が始まった。「何でこうなるんでしょうね」という問いかけがあった。その後に、ちょっとした間がある。往々にして、問いかけておきながら、すぐに進んでしまう授業がある。この間が、生徒の発言を引き出しているように感じた。

学習課題では、聴写が行われた。始める前に、一呼吸おいて構えをつくっていた。軽い真剣勝負ようである。適度な緊張感がみなぎっていた。先生が、「B5判の用紙の／短い辺と長い辺の／長さには／どんな関係が／あるだろうか。」と区切りながら言うのに合わせて生徒は書いていった。早い。すぐに書き終わった。その後、先生は課題を板書した。それを見て、生徒は確認していた。全員が聴写していた。毎時間、このようなことをやっていることは明白だった。毎時間の積み上げの成果である。その後、みんなで課題を読んだ。生徒の学習への集中力がさらに増したことがわかった。そして、「意味のわからない言葉はないですか」と続く。ここまで、適度なスピード感があり、コンパクトな導入となっていた。見事だった。

課題解決の段階に移った。相変わらず全員が集中している。実際に紙を折る活動を入れていた。これが、教材研究であろう。ここでも、「みなさん、どうですか」の後に間がある。自力解決では、「求められそうですか」「まずは、ヒントをもとに考えてください」そして5分とった。その間、先生は机間指導をしている。途中で「図を書き加えている人が多いね」と全体へのアナウンスが入った。あえて教室中に聞こえる声の大きさを話している。個別のアドバイスと全体へのアドバイスを使い分けていた。

グループになったが、生徒の動きが早かった。いつもやっていることは明らかだった。グループ活動のねらいは、わかる生徒が教えて、わからない生徒は教えてもらうというものだった。時間を5分とった。いつもやっていることのようなだった。座席も数学専用のものだった。「わかったかなあという人？」「だいぶ増えましたね」

次は、みんなで解決していく時間となった。タブレットを使って生徒に発表させた。これも生徒は慣れていて、それに対して、「質問ある人？」「納得？」と働きかけた。「わかった？」「大丈夫？」ではなく、「納得？」だった。これがよい。そして、「隣の人に説明してください」となった。頭ではわかったつもりでも、うまく説明できないことはよくある。「説明できた人？」「まだ少ない？」と言って、タブレットを使って別の生徒に発表させた。この発表を全員が聞いている。集中が途切れることはない。全員が数学のことを考えている。全員が同じことを考えている。あの空気感がいい。「どうですか？」「みんな納得？」「もう1回、隣の人に説明してください」と畳みかける。そして、「今度こそ説明できた人？」と確認していた。

まとめでは、短い辺：長い辺＝ $1:\sqrt{2}$ から、これが白銀比と呼ばれ、身の回りの生活で実際に使われていることの説明があった。ドラえもんやトトロがそうだという。振り返りでは、わかったこと、平方根について関心をもったこと、白銀比について関心をもったことなどの視点から書かせていた。それを生徒に発表させるところまで授業はいった。

今回の授業に限らず、この先生の授業は、基本的でオーソドックスな流れになっている。一般化できるということである。話し方に抑揚があり、ずっと笑顔だった。そのためか、先生の問いかけに対して、まだまだ声は小さいのだが、生徒は反応していた。授業内容の理解度に違いはあれど、50分の間、一人も取り残さなかった授業であることは確かである。この先生が、私の勤務する学校にいることの存在意義や影響力は計り知れない。この先生の授業を見るようになって3年目になる。見るたびに腕を上げている。着実な歩みである。次の授業も今から楽しみである。